



## 高専校長始末記

中村勝吾\*

高等専門学校とは中学校の卒業生を受入れ、実験実習を重視した5ヶ年間の一貫教育によって、卒業の際には大学工学部の卒業生にも劣らぬ実践的技術を身につけさせることを目標として教育している高等教育機関である。今のところ卒業生に対する産業界の評価が高く、バブル経済が崩壊する前は求人倍率が例年20倍を越えていた。このような国立高専が全国に54校あり、高専の制度がスタートしてすでに30年以上経過している。しかし筆者が大学在職中は高専の具体的な内容については全く知らず、関心もなかった。

このような国立高専に、無縁であった人間が、今年の春の定年まで7年間も校長として在職したのには今振り返って見ると、そのように運命づけられていたような気がする。

今回随筆の執筆を依頼された機会に多少高専のPRも兼ねてこの7年間の体験を語ってみたい。

1986年昭和61年12月も半ば過ぎたある日、当時の阪大大学長熊谷先生から突然電話があった。熊本電波工業高等専門学校の校長を是非とも引受けて欲しいとの事である。その電話を受けながら二つのことを思い出した。

その一つは“熊本”という土地のことである。青年時代から“熊本バンド”という言葉を通じて漠然とした憧れと親しみを感じていた。実は今から40年ばかり前、結婚式が終ったばかりの夜、夜行列車で大阪を立ち翌朝到着したのが

熊本駅で、朝の水前寺公園と熊本城(当時は天守閣は無く、宇土櫓も修理中であった)を見物して、すぐに阿蘇に向った。それ以来一度も訪れたこともないのであるが…。熊本着任の挨拶で関係機関を廻ったとき、多くの人からどんな御縁で熊本に来られた? と聞かれ、返答に困って“未知の場所で全く新しい仕事にロマンを感じてやって来ました…”等と答えていた。

もう一つの事は、学会で知り合った方で、国立大学の工学部長を最後に、創設されたばかりの国立高専の校長に就任された方に出会ったことがある。その時、国立高専の校長のポストは仲々居心地が良く、大学の学部長時代とは違って、校長の意志で自由に新しいことができるという話である。学長の電話を受けながら、新しい夢を求めて未知の領域にとび込んでみようかな、という気になっていた。しかし大学の定年まで2年ある研究生活を中断して大学から突然転出するのは周囲の人々にも迷惑を与えることであり、自分自身も心残りでもあったので、条件付で引受けることとした。その条件とは1年間阪大教授を併任することである。そうすれば1年の間に大阪で開催するため準備していた国際会議も完了し、残っている大学院生の行先の見通しも立つであろう。国立高専では前例の無いことらしく、文部省人事課との協議が必要であったが、結局その条件が認められ、数日後、文部省の高等教育局長と面接することになった。面接の場で校長として転出することは内定し、教授会の承認を待つばかりとなった。結局学長の電話を受けてから1週間余りの間に熊本行きが事実上決定したことになる。企業では当り前の事であろうが、在任中の大学教官としては珍しい事である。

熊本については100年以上前の歴史は“熊本



\* Shogo NAKAMURA  
1925年12月28日生  
昭和25年大阪大学工学部通信工学科卒業  
現在、(大阪大学名誉教授), 工学博士, 電子工学, 表面物理  
TEL 0726-92-2288

バンド”を通じて多少予備知識はあったが、現在の実状については全くの無知で、また熊本には一人の知人も居ない。予備知識を求めて大阪駅の近くにある、熊本県事務所を訪問した。しかし熊本県の特産物のPRの窓口としての機能しかなく、熊本の産業特にエレクトロニクス関連の産業については資料も情報も皆無であった。九州は日本のシリコンアイランドと呼ばれる程、半導体産業は盛んである筈である。しかし調査は後まわしにし、着任予定の高専内の設備、教官についての予備知識や学校内外の状況を調べたり、身辺整理をしている内に、4月の着任の時期を迎えることになった。

着任後、先づ緊張したのは入学式の式辞と、恒例となっている新入生の宿泊研修会で1時間余り訓話であった。式辞の方は何とか済ませ、後で事部部长に感想を求めると仲々格調の高い式辞だと批判が返って来た。新入生研修会では彼等と共に寝起きし、ゲームにも参加した点は好評であったらしいが、訓話で筆者の専門分野の話を取入れた処、生徒の反応は、意味不明で難解との事である。中学を卒業したばかりの15才の少年のイメージに合うような話をするには余程工夫が必要であることを痛感した。

着任直後の行事が一応終わり、産業界との接点を求めて早速熊本 NEC を訪問した。最新のVLSI製造装置が並んだすばらしい工場であるが、研究部門は勿論、開発部門も一切なく、三菱の熊本製作所も同様である。当時のある産業界紙に九州の半導体産業を評して、頭脳なきシリコンアイランドなどと自嘲ともとれる記事を見たが、その評判は当たっているようであった。

自分のこれまでの専門分野の経験をもって企業との連繫を求めることは当分諦らめ、学内の設備の充実と教職員との融和を計り学校運営に専念する決心をした。

電波の名称を冠した国立高専は仙台と訛間にもあり、九州には熊本電波高専を含め九校の国立高専がある。熊本電波高専の前身である電波高校の時代は熊本県下の最も入学の難しい三つの高校の内の一つと言われ、20数年前高専に昇格した後もその伝統は受けつがれているが、レベルの高い学生を受入れている高専の施設の

整備は他高専に比べ、最も遅れているような気がした。

全国と同様な国立高専は、特別の例を除き、すべて4～5学科の規模であるが本校に限り、三学科である。また創立当初からある電波通信学科(仙台、訛間電波高専と同様)で、現在国内では利用されていないモールス無線通信の実技等が必修で専門科目の単位数の内、15%を占め選択では40%を占め、新しい時代の通信技術を取り入れる余地は少ない。さらに学生の福利施設の整備が全国で最も遅れていること。クラブ活動、特に体育系のクラブのレベルが九州では最下位? であること、さらに全学科がエレクトロニクス関連学科であるが、その特徴が充分生かされていないこと等、数多くの問題点がある。しかも学内の大部分の教官は余りそのことを気にしていないように見えた。このため何とか自分の在任中に本校をせめて全国の平均的レベル以上に引上げることを願い、遅れをとっている原因を分析し、問題解決のフローチャートを自分なりに作製した。先づ教職員の協力を得るため、学科別に全教官とこの点を話し合いムード作りに取りかかった。また、かなり準備の進んでいた電子制御工学科新設に向けて先づ全力を集中した。幸い関係機関や地元の有力者の協力があり着任後半年位で明るい見通しを得、昭和63年度から新らしく電子制御工学科を設置し、新入生を受入れることができた。

次いで改革が遅れていた電波通信学科の改組は仙台、訛間各電波高専に遅れぬよう三電波高専が協力して郵政省とも交渉し、通信関係国家試験の受験に関する認定校の基準を定めた省令が一部改正されたので、古い学科名を平成元年から情報通信工学科と変更し、カリキュラムを全面的に改めた。これによって設備充実のための予算が配分されることになった。

エレクトロニクス関連四学科の体制が揃う時期を期して全学科のカリキュラムを見なおし、教育方法を改めるため、カリキュラム検討委員会を設置し、各学科より11各の委員を任命した。

筆者が大阪大学工学部に新設されたばかりの電子工学科、第1講座助教授に任ぜられたとき、

既設の電気、通信工学科と共に三学科が連携してカリキュラムの見直しが行われた。当時“工学基礎”ということが論ぜられているときでもあり、それを加味した新しいカリキュラム案が検討されたが、具体化には至らなかった。その時の願いを実現したいと考え、4月学科共通の専門基礎科目を低学年に取り入れた、統一カリキュラムの具体案作りを委員会に託した。それと共に学科別で入学した学生を学内で交流する機会を多くするため、混合学級の実行案作りを依頼した。

教官の意識の盛上がりもあり、集中審議による具体的手続も完了し、平成2年度より低学年(1,2年)の統一カリキュラムの採用と混合学級の試行が始まった。2年から学科別の3年に進級する際、一定の条件の下で転科を認めた結果各学科で、3~4名の転科が実現した。試行中、学生や教官に対するアンケート調査や討議の結果を見ても比較的良好な反応が得られた。今後、問題点をふまえて運用方法やクラスの編成方法に修成が加えられるであろうが、基本的な方向については定着しつつある。これらの結果は担当した教官によってまとめられた中間報告がすでに出版され、全国の高専に配布されている。

一方学生会の体育系クラブのレベルは学生の表彰制度を改める等いくつかの手が打たれた。学生中心の学内行事にも自からも積極的に参加したが、未だ目立った向上は見られず、今後に期待している。

平成4年度には国の景気対策のお蔭で年度末近くになって福利施設の予算が前倒しで認められ、念願の立派な建物が平成5年に完成した。しかも内部設備にもかなりゆとりのある予算が配分され、正に残り福と言えるであろう。また平成5年度の三次補正予算によって運動場や体育館の整備が可能となり、事務当局は10年分位の予算が一度に認められたとの事である。しかし担当する係は大変な事であろう。いづれにしても完成を見る前に私の任期が終わり次の校長にバトンタッチすることになった。

次に、任期の最終年度に当たる平成5年度が丁度本校創立50周年に当たり、記念行事の実施が前任校長からの申送り事項の一つであった。

どの学校でも実施している記念誌の発行、記念碑の設置、記念式典の他に新しい目玉をもう一つと着任以来考えていた。それは産業界から協力を仰いで教育研究基金を設立することである。幸い教官や事務部門の協力が期待できたので、同窓会や地元の産業界のトップを中心とした募金のための記念事業協賛会を設立した。しかし募金の時期が例のバブル経済の崩壊による不況と重なったため、当初予定された各社の募金依頼金額を縮小し募金先企業数を増やし、苦勞の末何とか目標額に近づいた。手持ちの準備引当金等も加え一応昨年末で打切り、基金を設立した。金利が下がり、期待できる金額は僅かであるが、次の世代に夢を託して50周年記念事業を無事完了した。話は元に戻るが、“熊本バンド”について附言したい。明治維新の頃、熊本の先覚者横井小楠の思想の流れをくむ実学党の影響下にあった熊本県政は革新的政策の一つとして熊本洋学校を明治3年に設立した。その学校にアメリカ人のL.L. ジェーンズが教師として招かれた。熱心なキリスト教信者であったジェーンズの感化を受けた学生の内、35人が熊本の花岡山に集合して“キリスト教精神による人類への奉仕”を誓って結成された集団を後で、“熊本バンド”と呼んでいる。彼等はキリスト教の故に熊本を追われ、学校も廃校となった。彼等は京都で開校したばかりの同志社大学の前身の英学校で学び、後、日本キリスト教組合教会の三元老を初め東京、大阪のYMCAの創設者教育界、実業界、政界のリーダーとして各方面で活躍している。ジェーンズの為に建設された熊本のコロニア風の洋館は、明治10年西南戦争の際設立された博愛社の拠点として用いられ日本赤十字の発祥の地ともなっている。その後、建物は水前寺公園の近くに移築保存されている。熊本着任後、早速訪問した。手入れは良く行き届いていて熊本バンドの遺品が展示され感激したが、熊本在住の人々が無関心なのは残念であった。しかし1991年ジェーンズ来熊120年にラフカディオ・ハーン(小泉八雲)来熊100年記念を併わせて、地元の熊本日日新聞が記念行事やキャンペーンを行ない、自分もかかわりを持つことができた。また熊本

## 生産と技術

バンドに関係の深いYMCAおよびそのスポンサー団体であるワイズメンクラブ、筆者の母教会と姉妹関係にある草葉町教会等を通じて、未知の地で多くの友人を得、仕事を離れた領域においても、7年間の単身赴任中充実した愉快的生活を過ごすことができた。またそれらの人脈を通じて学校の新学科増設や50周年記念事業等で多くの支援を受けることができた。

最後に、熊本電波高専ばかりでなく全国の高専は高校生と同年代の学生を含むため、教官は厚生補導や課外活動の面で多大の負擔を負わされながら教育に熱意を燃やし、5年間の一貫教育で大学工学部にも負けない実力をもった卒業

生を産業界に送り出している。また、学内外の教科研究会等を通じて教育方法の地道な研鑽を重ねている。しかも貧弱な研究施設を活用して大学教官に伍して研究成果をあげている教官も多い。丁度本文を執筆中に、ある新聞の社説で“授業の質を高める大学改革に”と題する論説を掲載していた。高専の教官はすでに高専が設立された30年前からこのことを実行している。だからこそ高専卒業生が産業界から高い評価を受けていると思う。産業界を始め関係機関が高専ならびにその教官の努力に対する評価と支援を切に願ってペンを置く。

